

## 藤原新也のカリスマ性は放浪50年の賜

雪が多摩地方を薄化粧した翌1月29日、わたしは東京都立砧公園にある世田谷美術館を訪れた。「祈り・藤原新也」展鑑賞のためだ。最終日で日曜日で快晴。市民絵画展などもあってか同館は、去年末に1度目の鑑賞をした折とは、比較にならぬほどの人出である。

藤原新也は1972年「インド放浪」から、81年「全東洋街道」、83年「東京漂流」と「メント・モリ 死を想え」の同時刊行、90年「アメリカ」と、つねにトップランナーとして走ってきた。

眼の思想家と評されるその実力ゆえもあろうが、わたしは彼の具備してるカリスマ性こそ、藤原新也をトップに立たせていると考えている。他者はまず追い越すことのできないカリスマ性だ。それは幾度かは死ぬ目に遭いながらも、世界を放浪し続けた藤原新也にたいする神からの贈物なのだ。

例えばきっちり22年前に開催された「藤原新也 旅の全軌跡」でのことだ。2000年11月下旬、長野県駒ヶ根市の駒ヶ根高原美術館には、たくさんの紅赤ののぼり旗が立っていた。無数の巨大な写真パネル、紙ロールを直接使用した4メートル、5メートルもの箴言を書いた長大短冊、文明にたいする大胆な滅亡の予言など。練りあげた構成と金をかけた展示は全館貸切、全館鳴動してるがごときだった。

そのなかに「免疫不全ハルマゲドン」の予言があった。人類は免疫不全で亡ぶとあった。今のコロナ世はこれにどんぴしゃりだと、改めて痛感する。

コロナ世はマスク世だ。ワクチン接種世だ。消毒第一、体力増強、免疫力アップの世だ。あらゆる業種の店頭で消毒液が置いてある。若い女性は化粧品と一緒に、手指消毒の噴霧器をポーチに入れている。飲食店のテーブルには塩、胡椒の脇に卓上型超小型消毒器を備えている。……

藤原新也の言う免疫不全云々はもともと、日本人の潔癖症や殺菌剤多用を問題視した箴言だった。20年後それは的中した。

他者は決して追従できない放浪の旅と、おびただしい数の「奇跡」との出会いを総覧した今回の50年展はシンプルな印象だった。老成、老熟ゆえだろうか。もう78歳だ。しかし彼は決意する。「一灯照隅 万灯照国」の言葉を胸に〈わたしは小さな祈りをあきらめない〉と。

5月8日からコロナは2類から5類に移行し、法定伝染病のしぼりは緩くなる。一番恩恵を受けるのは政府。一番ダメージを受けるのは持病のある老人、金のない者など弱者である。神戸女学院大名誉教授内田樹は指摘する。〈自己防衛できない人が亡くなってもそれは自己責任だというメッセージを政治が先導していると解釈される〉(東京新聞1月26日)

コロナは老人喰い病である、のわたしの思いは、いよいよ5月から露わになるのではないか。

2月10日首都圏は雪だ。夕方までの積雪は多摩地方西部で10～13センチだった。



2023年1月29日 筆者撮影